

岩崎の大蛇

むかし、岩崎村の奥の山の上に、大きなくぼ地があり、大雨のときには池になるところがありました。そこには、背たけ以上もある草がおい茂っていましたし、大蛇が住んでいるというので、人々はめったに近づこうとしませんでした。

ある夜のことです。

ここの大蛇が村の一人の老人の夢枕に立ち、長い間住んできたところであるけれども、近くこの池から出たいと思う。ついては、じゃまをせずに村を通させてくれないか、といったというのです。あくる日、老人は村人たちにこのあしぎな夢の話をしました。人々は気味悪がり、

「いうことをきかなんたら、どんなたたりをするかわからへん。通してやった方がええ。」



というものや、

「そんな大きな蛇が通ったりしたら、田や畑の作物がめっちゃめっちゃになっちゃる。なにがなんでも、閉じこめておく方がええ。」

という人などがあり、くちぐちに意見を出しあいました。長い時間の話し合いのすえ、とうとう蛇を出してやらないことにきめました。そして池の出口に蛇杭を打ちにいく相談をはじめたのです。

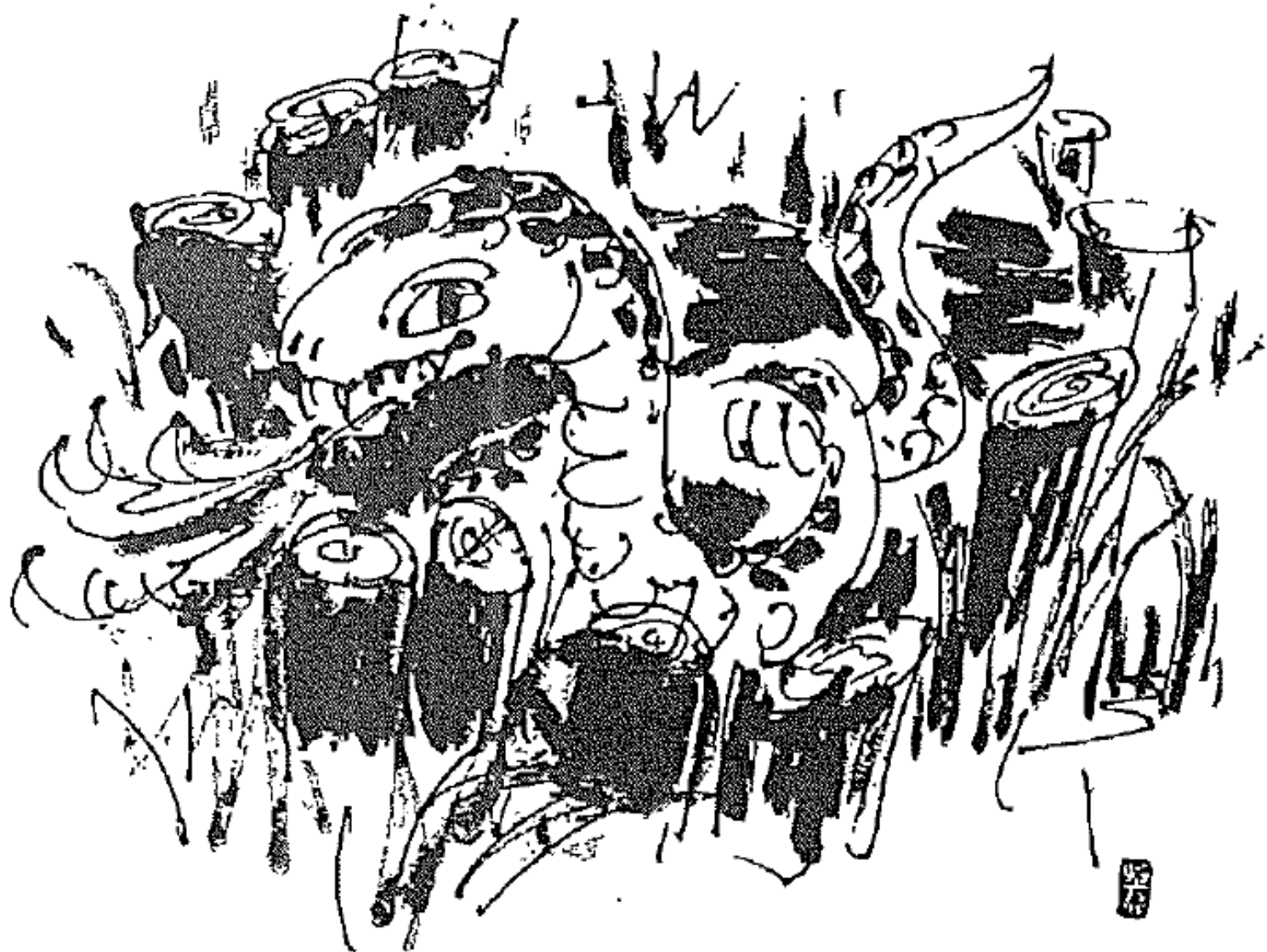
そのとき、不安そうに、

「そうかたんげえー言っとるけど、仕事をしとるときに、もし大蛇が出てきたらどねえするんだ。」

という者がありました。

とたんにみんなは黙ってしまいました。ほ





岩崎

んとりに大きな蛇が出てきたらどうでしょう。大蛇は見ただけでも、見た人を死なせてしまおうといい伝えられています。すると、

「暮坂（きりさか）のあの男に来てもらったら、どねえんだ。」

と、ひとりがいいました。

岩崎村の奥の山を一つ越して、出石に入ったところに、暮坂という村があります。

この村に、四十歳（よじゅうさい）近くにもなるというのに独身で、村はずれの山の中にひとり離れて住んでいる不気味な男がいました。蛇が大好きで、家の中や、家のまわりに、うようよするほど「しま

蛇」を飼っていて、ふところに入れたり、首に巻きつかせたりして、かわいがっているというのでした。

この男のうわさを聞いていたほかの人たちも気づき、

「そうだ。あの男がいっしょに行ってくれたら、大蛇が出てきても大丈夫だろう。」と考えました。さっそく村の総代が頼みに行くことになりました。

その夜、大蛇はふたたび老人の夢の中にあらわれました。そして悲しそりに、蛇杭があると出られないから、なんとか打たないようにしてくれないか、といって消えたというのです。

しかし、人々は聞きいれません。暮坂の男が承知してくれましたので、村じゅうの男たちはいっしょに池の出口のところに登り、蛇杭をぎっしりと打ちこみました。

願いのかなえられなかった大蛇は悲しみ、そして怒りました。この上は、なんとしても自分の力で、広いところへ出ていこうと考えたのでしょう。ある嵐の夜、大蛇はありつたけの力をふりしぼって、雨や風をよびました。

このため、岩崎の谷は夜っびてごうごうと鳴り、雨は滝のように、家々に、田畑におそいかかりました。村人たちはそのすさまじさにおそれ、ひっそりと家の中で、怒りの静ま



るのを待っていました。

大蛇の池には、もうまんまんと水が満ちあふれていたことでしょう。

夜半すぎ、村人たちは谷の奥の方におこつた遠雷のような地鳴りが、やがて家々の戸障子を揺るがせて走り去っていったのを知りました。何ごとがおこつたのでしょうか。

あくる朝、明るくなってから人々はそのわけを知りました。

家々の下の谷すじが一面の泥の海になり、大きな岩がごろごろところがっています。

ようやく穂の出そろつた稲はその下に埋もれてしまいました。

谷の奥の大蛇の池があったあたりは、山はだがざっくりと割れ、池はあとかたもありま

せん。大蛇が大水のいきおいに乗って池の囲いを破り、谷をくだっていったのでした。

村人たちは大蛇のしわざをにくみました。

このうらみを晴らすために、旧暦の八月一日に、太さはこどもの脷ぐらい、長さは五メートルもある縄をない、これを大蛇にみたてて村中の人ひき合い、ひきちぎる行事をおこなうことにしました。首尾よく切れたなら、大蛇を退治したことになります。そして、一日の農休みがもらえることになっていましたから、こどもや若者はそれこそいっしょうけんめいにひっぱったということです。

しかし今ではこの行事はまったくおこなわれておりません。

（大蛇の話は 上小田にも残っています。夢枕に立った大蛇の願いを聞かないで、蛇抗を打って、出られないようにしてしまいました。）

大蛇は仕方なく、水谷の谷を下って出ました。それから、宿南の方は豊作で栄え、上小田は、たたりで不作で困ったということです。